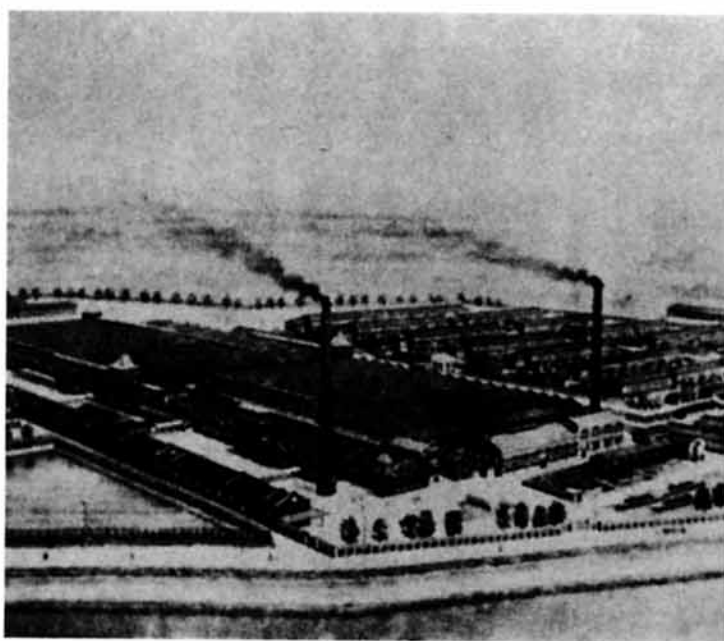


### (三) 産業の発達

姫路木綿もめんと県立紡績所ぼうせき

江戸時代に姫路藩の専売品せんとして全国に名をはせ

た姫路木綿は、藩がなくなると販路はんろを失い、しだいにさびれていきました。そのうえ、明治になって西洋の安い綿織物が大量に輸入されたので、姫路の織元おりもとや木綿問屋は次々に倒れてしまいました。



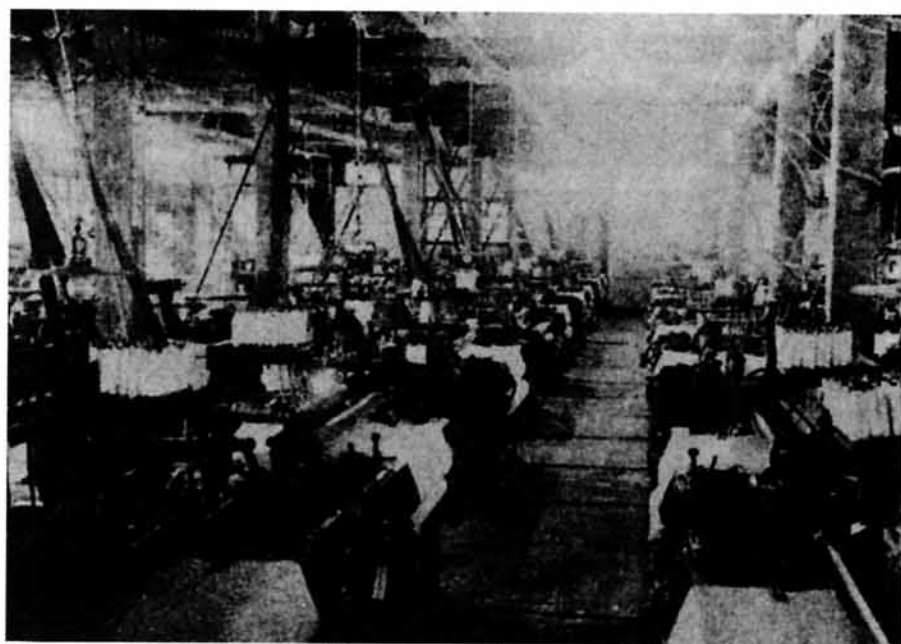
創立当時の福島紡績飾磨工場

当時、飾磨県令（後の知事）をしていた森岡昌純もりおかまさずみは、薩摩藩の出身でした。

薩摩藩は江戸時代の終わりごろ、イギリスから紡績の機械きかいを買って藩営の紡績

工場を造って成功していました。

森岡県令は、このことをよく知っていましたから、姫路木綿を再興しようと考えました。「失業した武士に仕事を与えるために紡績工場を建てる」と言って政府から補助金をもらい、一八七八年（明治一一年）三月、姫路市八代やしろの官有地に県立姫路紡績所を建設しました。服地や木綿縞しま、白木綿、ゆか



明治時代の紡績工場（高井紡績工場）

た地、ネルを生産するかたわら、  
姫路地方の織物技術の向上のため  
に指導を続けました。県立紡績所  
は、約十年後に民間にはらいさげ  
られました。その後の姫路の紡  
績業の発展に大きな役割を果たし  
ました。

姫路の特産物 明治の終わり

から大正時代にかけて、姫路の産  
業は急速に発展をとげました。銀  
行や電燈とう会社ができ、多くの工場  
もできましたが、このころの姫路



マッチ工場の作業風景（大正初年）

の代表的な特産物は織物・皮細工<sup>ざいく</sup>・  
マッチ・舟くぎなどでした。

皮細工の技術は千六百年ほど前、  
大陸から伝わったといわれています。  
皮細工の産地は市川沿いです  
が、ここで作られる白なめし皮は、  
わが国で一番品質が優れていて、  
江戸時代から有名でした。

マッチは、一八七五年に初めて  
東京で生産され、一八七七年（明  
治一〇年）には、神戸と尼崎<sup>あまがさき</sup>で生  
産が始まりました。姫路では一八

九七年（明治三〇年）ごろから製造が始まり、大正時代にはいると妻鹿・白浜・飾磨・網干一帯にマッチ工場ができました。

姫路でできたマッチは国内だけでなく、中国大陸やアジアの国々に輸出されるようになり、わが国の代表的なマッチ生産地になりました。

最近、自動点火装置の普及と、使い捨てライターの出現などで、マッチ産業は苦境に追いこまれ、転業する工場が増えました。

**大正の米騒動** 第一次世界大戦（一九一四～一九一八年）中のインフレーションで、米の値上がりがひどく、大戦が始まるまで一・五キロを十二銭で買えたのが、一九一八年（大正七年）八月には八十銭にまで上がりました。今とちがって米が主食の時代でしたから、人々はたいへん困りました。

八月三日、富山県の漁村の主婦が集団で米屋をおそって、米を奪う騒動が起こり、それは全国へ津波のように広がりました。姫路でも八月九日、海岸部の

塩田地帯六百戸の主婦たちは、村役場におしかけ、米の値下げを要求しました。十日には、飾磨町の主婦が米屋におしかけましたが、飾磨の米屋は米十・五キロを三十八銭で売り、難なんをまぬがれました。十三日夜には南畝町のうねん・下寺町しもでら・福本町ふくもとの米屋が群衆しゅうげきに襲撃されて米を奪われました。河間町こはさまや梅ヶ枝町うめがえでは、米屋が一・五キロ二十銭の安売りの掲示けいじを出して打ちこわしをのがれるという、たいへんな騒動でした。生活の苦しさから起きた米騒動でしたが、その後のわが国の労働運動や大衆運動に大きな影響えいきょうを与えました。